

8. まつる一年中行事一

菊地暁 (folklore.lecture@gmail.com)

①年中行事 annual ritual 原論

- ・儀礼 ritual : 「形式性」をとめない「非功利的」な目的をもつ行為
- ・いわゆる「年中行事」と民俗学好みの「年中行事」
- ・「切迫した生存感覚に立脚する慣習的行為の体系」(≒「呪術」の定式化、周期化)

②柳田国男の「固有信仰論」

- ・『日本の祭』(1942) : 「祭から祭礼へ」(=「都市」の成立)
 - ①「見物=観客」の発生、②「風流(ふりゅう)」の展開、③「職業神主」の出現
 - ・マツリの原型
 - ①物忌・精進、②祭場の標示、③神供(火、食物、芸能)、④直会 : 神人共食
 - ・『祭日考』(1946) 時期 : 定期的(2月と11月または4月と11月→春と秋)
 - ・『山宮考』(1947) 場所 : 臨時(山と里の往還)
 - ・『氏神と氏子』(1947) 祭祀対象=祖霊/祭祀者=同族集団(イエ)
- 「柳田祖霊神学」祖霊一元論 : 田の神=山の神=家の神(祖霊)

③伝統的な年中行事

- ・春祭り秋祭り : 予祝と収穫感謝
- ・盆と正月 : 祖先祭祀
- ・夏祭り : 疫病除け
- ・神事/神賑行事/イベント

④年中行事の近代/現在

- ・ハレ/ケ(非日常/日常、聖/俗)区分の曖昧化
- ・客体化(objectified)される年中行事(観光化、まちおこし、文化財保護…)
- ・遍在する呪術的思考/定式化・周期化へのハードル、「祭りがあるということ」の意味

*文献

- 柳田国男 1939『歳時習俗語彙』民間伝承の会
米山俊直 1974『祇園祭』、1979『天神祭』中公新書
みうらじゅん 2000『とんまつり JAPAN』集英社
菊地暁 2001『柳田国男と民俗学の近代-奥能登のアエノコトの二〇世紀』吉川弘文館
南里空海 2011『神饌 神様の食事から“食の原点”を見つめる』世界文化社
釈徹宗・高島幸次 2012『大阪の神さん仏さん』140B
中島誠一・辻村耕司 2012『近江の祭りを歩く』サンライズ出版
本多健一 2015『京都の神社と祭り 千年都市における歴史と空間』中公新書
幡鎌一弘・安田次郎 2016『祭りで読み解く歴史と社会 春日若宮おん祭りの900年』山川出版社
武田俊輔 2019『コモンズとしての都市祭礼 長浜曳山祭の都市社会学』新曜社

したのではないかと思つてゐる。すなわち少なくとも諸國の多くの御社の神の御渡りにも、この綺麗な御輿を用い始めたのは流行であり改造であり、近世の平和期以後の文化であり、従つてまた主として都會地にまず入つたもののものである。工芸史の方面から見ても、この事はかなりはつきりと説明し得られる。つまり日本の新たな文化は、第一次にまた広範囲に、この方面に適用せられたのである。これにはすこぶる複雑な社会心理が働いてゐると思ふが、とにかくこれによつて、多くの城下町や湊町に、一つの立脚地または一つの力と頼むものができたのだが、その代りには「日本の祭」は、よほど昔の世とは変つたものになつた。これがまたいわゆる祭礼を、他の種類のさまざまの祭と対立させて、考えてみなければならぬ理由でもある。

五

日本の祭の最も重要な一つの變り目は何だつたか。一言でいうと見物と称する群の発生、すなわち祭の参加者の中に、信仰を共にせざる人々、言わばただ審美的立場から、この行事を觀望する者の現われたことであらう。それが都會の生活を花やかにすれば、我々の幼い日の記念を楽しくもしたととも、神社を中核とした信仰の統一はやや毀れ、しまひには村に住みながらも祭はただ眺めるものと、考えるような氣風をも養つたのである。この氣風はむろん近世に始まつたものでない。従つてすでに明治以前からも、村里の生活にも浸潤し

ていた。村の經濟の豊かな年には、農民はいつもこの「見られる祭」を美しくしようと心掛けつつ、しかも一方には彼等傳來の感覺、神祕と祖先以來の御約束を、新たにしたいという願いを棄てなかつたゆえに、勢い新舊の儀式のいろいろの組合せが起り、マツリには最も大規模なる祭礼を始めとして、大小幾つとなき階段を生ずることになり、一つの名をもつて総括するの無理なほど、さまざまの行事が含まれることになつたのである。そういう中でもことに複雑で、ただ見ていただけではちよつと沿革のわかりにくいのは、神さまを祭場へ御迎え申す手續きであつた。前年私は甲州の御岳に参つたとき、ちよつとその日が夏の祭の日だつたので、旅人として詳しく拜觀することができた。この祭にはまず金色の神輿が出て、それには神殿の御鏡を神官が袖に奉じて、輿の中へ御移し申す式もあるのだが、他の一方には神馬がその行列の中に加わつてゐる。この馬は今村の有志家から借り上げるらしいが、これには神官が乗るのでもなく、またただ飾りとして後から曳くのもなく、特別の鞍があつてその中央に御幣を立てるようになってゐる。そのまた御幣というのが毎年の祭ごとに、後から後からと白紙で剪つたしで、幣串のまわりに巻き立てたもので、御幣とはいつてもまん丸な独染のような、珍しい形のものになつてゐる。本来はこれが神靈の依坐であつたことは疑われない。すなわち新式の飾り御輿を、ここでもいつの頃からか担ぐことにはなつてゐるのだが、そのために前々からある神馬で御迎え申す方式は中止しなかつたので、二通りの乗物が連なることになつてゐるのである。

この御社の古い方の神の依坐は、御幣すなわちミテグラになつてゐるのであつたが、これ

いつから言ひ出したとも知れぬ言ひ伝えをもち、住民もまたそれを誇りにしてゐるものがある。いずれも大昔からこの通りのようにいうが、実は近年おおいにそうなつたようである。こういう空氣の中に大きくなつた人々は、知らぬ間に祭の概念を変えられてゐる。そうしてこれという見どころのない村々の小さな祭を、何だか氣の毒なもののように考え始めたのである。

九

祭と都市文化との交渉はかなり深い。その中でも祭の季節というものは、誰の目にもはつきりとしてゐる。町の祭の思ひ出は夏のものに多く、夏の祭というものは上代に少なかつた。もちろん四時の境目ごとに、祭を営むべき機会があつたらうが、一年を通じていちばん大きな祭は、何としても秋の収穫後の、物の豊かな時に行われるもので、その次には春の末または夏のかかり、農村では苗代ごしらえにかかる前のものがあつた。旧曆四月八日という日が、特に山の祭と關係があつたようである。人のよく言うのは春秋兩度の祭、これは農業ことに稲作の始めと終りとを、表示したことはほぼ確かだ、その前と後と定まつた日を、山の神が田に下りまた田の神が山に入る日として、祭るといふ風も農村には多い。あるいはこれをえびす様が稼ぎに出る日、または大黒様が稼ぎから戻つて来られる日などともいって、少しづつ言ひ伝えは變つてゐるが、國の公けの祭の新嘗祭に対して、二月に折年

祭があるのと本の趣旨は一つのものだと思ふ。

曆はわが邦では農作のため、同時にまた神祭のために備えられたもののように思われる。少なくとも祭に關係のない節日というものは元はなかつた。五節供という名称は武家では重んじていたようだが、農民の間では節供といへば三月三日と五月五日が主で、正月と七月の七日もただの日ではなかつたが、これを節供の一つとまでは思つてゐない者が多かつた。九月九日も節供と呼んでゐる土地はあるが、これだけはやや別の心持をもつて迎へられてゐる。すなわちこの日をもつて大祭の日、また祭礼の日とする地方が多かつたのである。九州の北半分では、クニチというのが村の御社の例祭の日を意味してゐる。文字では供日とも宮日とも書いてゐるが、なおその名の起りは九日であつて、たまたまその日に祭をせぬ土地があつたために、これを別の語かと思ふようになったのである。隣近所互いに往來して、長く秋祭の喜びを続けるように、わざと八日も十日十一日も、日をちがえてゐる村が私の郷里などにも多く、たしか明治の終り頃に、その弊害を認めてこれを九日に統制したことがあつた。関東の各地にも、またクニチという名がある。これははつきりと九月九日のことと認め、ただ作物成熟の遲速に応じて、三九日と稱して中の十九日でも、末の二十九日でもよいことにしてゐる。そうして例外もあるか知らぬがこの方面では、祭礼とも名づくべき大祭は春季に挙行し、九日はただ物静かな家々の食ひ祭、すなわち親類が互いに訪問して、酒を飲んで楽しむ日としてゐるものが多いようである。それでもこの日は馬場に櫓を立て、御宮では太鼓を叩き、また西日本でいうところの頭屋祭がある。ただ祭礼といつてよいような行列や催し